

大学生の自伝的記憶における感情と出来事の内容¹

屋 沢 萌*

Emotional characteristics and contents of autobiographical memories in undergraduate students.

YAZAWA Megumu

Abstract

Autobiographical memory is the memory of personal experiences related to self (Conway & Pleydell-Pearce, 2000). The ability to combine experience and self develops in adolescence (McLean, 2008). In this study, undergraduate students were asked to freely recall autobiographical events. The content of these memories was analyzed, and the temporal transitions of associated emotions were identified. The results indicated that events experienced during ages 3-6 and 15-18 years were recalled more frequently than those experienced during other periods. The results also indicated that emotions differed depending on the age when the event occurred. Events associated with gratitude, sadness, surprise and distress generated more positive feelings when recalled than did other events. The content of most memories was classified as follows: school/education, play (such as travel), praise/achievement, events involving others, and failure. Most memories recalled from the ages of 3-6 years were categorized as “play (such as travel)” and “failures”, and those recalled from the ages of 15-18 years were categorized as “school/education” and “praise/achievement”. The relationships between emotions and the content of autobiographical memories in undergraduate students are discussed extensively.

Keywords : autobiographical memory, emotion, contents category, self, free-recall

問題と目的

人が生活の中で経験した、さまざまな出来事に関する記憶の総体（佐藤他, 2006）は自伝的記憶と呼ばれ、自己にとって重要な意味を持つ個人の経験に関する記憶であり、我々の感情や個人的な意味に、より結びついている（Conway & Pleydell-Pearce, 2000）。

自伝的記憶と自己との関連について、McLean（2008）は、経験と自己を結びつける能力が発達する時期は青年期であり、ライフストーリー発達の重要な段階と主張している。ライフストーリーとは個人の人生に関する過去の一貫した語りであるが、ライフストーリーにおいて自伝的な想起と自己の理解は結びつけられているという（Habermas & Bluck, 2000; 亀崎, 2010）。青年期はアイデンティティ発達の時期であり、このアイデンティティと自伝的記憶もまた相互的な関係にあるとされている（Wilson & Ross, 2003）。山本（2013）は、大学生を対象とした調査により、アイデンティティの確立度の個人差が自伝的記憶の鮮明度や重要度、感情喚起度といった特性に影響することを示唆している。これらの知見に基づくと、自分史を構成するような重要な過去の出来事や経験についての考えを集約するようなライフストーリーが構築されることによって、アイデンティティの確立が促され、自伝

キーワード：自伝的記憶、感情、内容カテゴリ、自己、自由再生

*平成27年度生 人間発達科学専攻

的記憶のあり方もさらに変わっていくのではないかと考える。青年期の自伝的記憶と自己、アイデンティティとの関連はしばしば指摘されているものの、自伝的記憶に伴う感情と自己がどう関連するのか、具体的に青年期にはどのような自伝的記憶が想起されやすいのかについては、いまだ不明な点が多い。そこで、本研究では青年期の自伝的記憶について、出来事に対する感情や出来事の内容を検討し、自己との関連を明らかにすることを目的とした。

自伝的記憶に伴う感情については、ポジティブやネガティブといった感情、あるいは感情の覚醒度を中心に検討されてきたが (Conway, 2005; Shimizu, Anderson & Takahashi, 2012; Shulkind & Woldorf, 2005)、自伝的記憶に伴う感情やその程度は様々であり、個別の感情による検討が必要であると指摘されている (榎, 2007; Shulkind & Woldorf, 2005)。また、本来ネガティブな出来事であっても時間経過に伴いポジティブな認識に変わることもあり (Shimajima, 2004)、自伝的記憶に伴う感情の時間的変化についても検討する必要があるようにみうけられる。

自伝的記憶の内容については、Holmes & Conway (1999) と Haque & Hasking (2010) の知見がある。Holmes & Conway (1999) は30歳~70歳の参加者を対象に個人的な出来事を想起させたところ、人間関係 (Relationship)、生死 (Birth/Death)、仕事/学校 (Work/School)、家やレジャー (Home/Leisure) といった内容が10代~20代にかけて多く想起されること、つまり、レミニセンス・バンプ (reminiscence bump; 以下、バンプ) がみられることを示した。Haque & Hasking (2010) では、特定の感情に関する出来事を50歳から76歳の参加者に想起させ、バンプと複数の感情との関連や想起されやすい内容を示した。これらの知見から、10~20代の出来事は記憶として残りやすいが、内容やそれに伴う感情によって想起のしやすさが異なる可能性が考えられる。しかし、いずれも30歳以上の成人を対象とした研究であり、バンプの時期にあたり、ライフストーリーが発達しアイデンティティが確立される青年期に想起されやすい内容については十分検討されていない。青年期に想起される自伝的記憶の内容を調べることで、後にバンプの時期の経験として想起されやすい出来事とそれ以前に経験される出来事で想起されやすい内容の違いを明らかにできるのではないかと考える。

本研究では、青年期にあたる大学生に自身の自伝的記憶を想起させ、出来事ごとに感情を評価させた。その際、自伝的記憶に伴う感情が時間経過によって変化するかをみるため、出来事が起こった当時と想起時 (今) における評価をさせた。なお、前述のとおり、自伝的記憶の感情は時間的な変化を伴う可能性が一部で指摘されているが、複数の異なる感情ごとにみた場合に、時間経過によってどの感情が変化しているのかについては、ほとんど検討されていない。本研究では出来事に対する特定の感情がどの程度変化するかについて、出来事に対する当時と今の感情評定値の変化の割合を求めることで検討する。また、近年、青年期以降の自伝的記憶研究で注目されている、ポジティブな情報の想起が多くなるというポジティブ優位性効果 (positivity effect: 秋山・清水, 2012; Fernandes, Ross, Wiegand & Schryer, 2008; Mather & Carstensen, 2005; Shulkind & Woldorf, 2005) がみられるのかを検討する。

出来事の内容については、Haque & Hasking (2010) の分類を参考にカテゴリ分けを行い、青年期の自伝的記憶における内容の特徴を調べ、自己の発達との関連について検討する。これらの結果に基づき、大学生ではどのような出来事がより多く想起されるのか、感情との関連から自伝的記憶と自己についての考察を行いたい。

方法

調査期間 2013年2月

調査対象

京都市で調査の承諾が得られた18歳から21歳の女子大学生42名 (平均年齢19.50歳; 標準偏差0.66) であった。

調査方法

調査は1対1で実施した。調査時間は40分程度であった。出来事の想起については、過去の記憶の内容について思い浮かぶままに質問紙に記入してもらおうという形式で実施した。回答用紙には、①それはどんな出来事ですか。②その出来事が起こったとき、あなたは何歳でしたか。③その出来事が起こった場所はどこですか。④その出来事が起こったとき、誰と一緒にいましたか。(1人の場合は記入の必要はなし) の4点について記入を求めた。

手続き

1) 自伝的記憶の想起

まず、参加者に自伝的記憶の想起と記述をもとめた。想起と記入は、0歳から9歳までの出来事と10歳から始まって今から1年前までの出来事に2段階に分けて行った。大学生に自由再生による自伝的記憶の想起を求めた場合、最近の出来事から順に想起しやすいことが知られている (Anderson & Conway, 1993)。経験時期による違いを検討するには、できるだけ多くの出来事を想起してもらう方がのぞましいため、想起を2段階に分けて行った。

調査者の教示は以下の通りである。

「今から、0歳から9歳までの出来事を思い出して書いていってください。まず、その出来事がどんな出来事であるかをできるだけ詳しく書いていってください。次に、その出来事があった時の年齢と出来事が起こった場所を記入してください。最後にその出来事が起こったときに一緒にいた人を書いてください。1つの出来事を書き終わったら、次の出来事を記入していってください。こちらが「はじめ」「終わり」の合図をします。出来事の内容はなんでも結構ですし、順番も気にせずに思い浮かぶままに記入していってください。」

想起および記述時間はどの参加者においても7分程度で調査者から終了の合図をし、次の段階に進んだ。

「次は10歳から始まって今から1年前までの出来事を思い出して同じように書いていってください。」

こちらも7分程度で調査者から終了の合図をした。対象者には話したくない出来事や思い出したくない出来事は記述する必要がないことをあらかじめ伝え、自ら記入をやめた参加者に対しては、そこで終了とした。

2) 出来事に対する感情評定

次に、想起されたそれぞれの出来事に対して、質問紙を用いて当時と今の感情評定を5件法 (1. 全くそう思わない—5. 大変そう思う) によって答えるよう求めた。各出来事に対する「当時」の評定に用いた感情語は、Russell & Carroll (1999) からイメージしやすい単語8個 (嬉しい・楽しい・誇らしい・ありがたい・驚いた・悲しい・恥ずかしい・辛い) を選んで用いた。さらに、「今」の感情評定には、これらに「懐かしい」「戻りたい」を加えた、計10個 (嬉しい・楽しい・誇らしい・ありがたい・驚いた・悲しい・恥ずかしい・辛い・懐かしい・戻りたい) の感情語を用いた。感情評定については、時間制限はなかった。また、本調査では同じ出来事に対する当時と今の感情評定を参加者に求めているが、これらの評定方法が理解しにくいと訴える参加者や実施が困難であると判断された参加者はみられなかった。

結果と考察

全参加者42名から想起された出来事の数500個、1人あたりの平均想起数は11.90個 (範囲6-22, SD=3.34) であった。これら全参加者42名から得られた出来事500個のうち、年代が不明瞭な出来事10個を排除した490個を対象とし、分析を行った。

想起率の分布

想起時の年齢を3歳ごとに7つの区分 (1~3歳、3~6歳、6~9歳、9~12歳、12~15歳、15~18歳、18歳以上) に分け、これらを年齢区分とした²。各年齢区分における個人の想起数を個人の総想起数で割った値を、個人の各年齢区分における想起率として求めた。年齢区分間で分散に有意差がみられたため、Kruskal Wallis検定によって個人の想起率の平均を年齢区分ごとに比較した結果、有意な差がみられた ($\chi^2=110.34$, $df=6$, $p<.05$)。Mann-Whitney検定を行った結果、3~6歳と15~18歳の出来事の想起率は1~3歳、9~12歳、12~15歳、18歳以上の出来事の想起率よりも平均ランクが有意に高いことが示された (いずれも $p<.05$)。図1は、想起された出来事の想起率を年齢区分ごとに表したものである。

以上より、青年期の自伝的記憶の想起量について、3~6歳と15~18歳の出来事が他の時期の出来事よりも多いことが示された。青年期を対象とした先行研究では、年代ごとや学年ごとに区別して自伝的記憶を想起させているものが多く (榎, 2007; 佐藤, 2008他)、本結果は出来事を自由に想起させることによって明らかになった、新たな知見であるといえる。また、1~3歳の出来事については、先行研究 (Rubin, 1982; Pillemer & White, 1989) と同様に日本の大学生においても幼児期健忘の影響がみられることが示された。

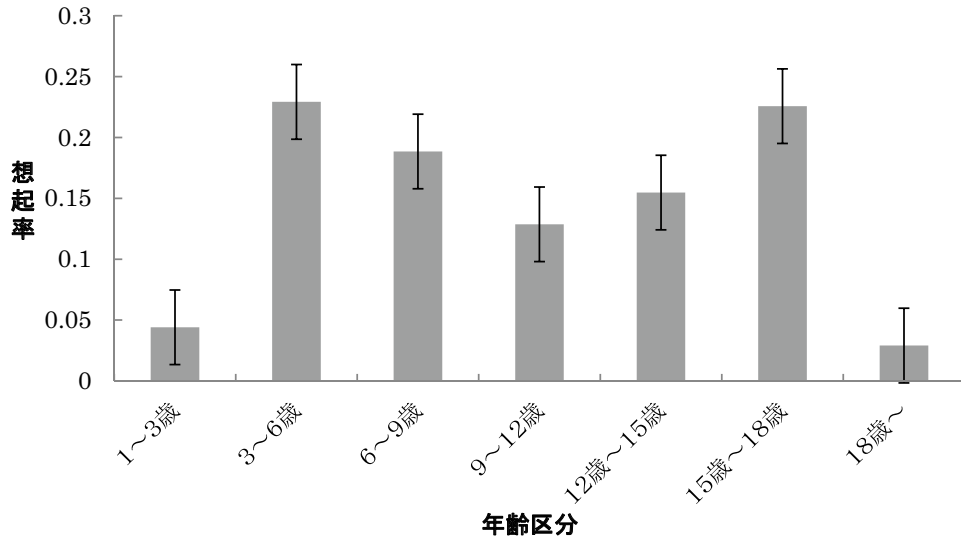


図1. 各年齢区分における想起率³

出来事に対する感情評定

想起された出来事に対する当時の感情8項目について、各年齢区分における評定平均値を求め、一要因の分散分析またはKruskal Wallis検定を行った。嬉しい・驚いた・恥ずかしいという3項目については年齢区分間で分散に有意差がみられなかったため一要因の分散分析を行い、楽しい・誇らしい・ありがたい・悲しい・辛いという5項目については年齢区分間で分散に有意差がみられたためKruskal Wallis検定を実施した。

その結果、誇らしい・ありがたい・悲しいという感情について、有意差がみられた ($\chi^2=18.45$; $\chi^2=34.38$; $\chi^2=16.96$, $df=6$, いずれも $p < .05$)。有意差がみられた3項目について、Mann-Whitney検定を行った結果、誇らしいという感情において15~18歳の出来事は3~6歳、6~9歳、18歳以上の出来事よりも平均ランクが有意に高いことが示された ($p < .05$)。ありがたいという感情においては15~18歳の出来事は1~3歳、3~6歳、6~9歳、9~12歳の出来事よりも平均ランクが有意に高い傾向であることが示された ($p < .05$)。また悲しいという感情は、3~6歳の出来事が12~15歳、15~18歳、18歳以上の出来事よりも有意に高いことが示された ($p < .05$)。嬉しい・驚いた・恥ずかしい・楽しい・辛いという感情については、有意差はみられなかった (嬉しい: $F=1.98$, $df=6/486$; 驚いた: $F=1.20$, $df=6/486$; 恥ずかしい: $F=.84$, $df=6/486$; 楽しい: $\chi^2=10.53$, $df=6$; 辛い: $\chi^2=8.13$, $df=6$, いずれも $n.s.$)。

図2は、想起された出来事に対する当時の感情評定平均値のうち、有意差がみられた3項目 (誇らしい・ありがたい・悲しい) を年齢区分ごとに表したものである。

想起された出来事に対する今の感情10項目について、各年齢区分における評定平均値を求め、一要因の分散分析またはKruskal Wallis検定を行った。嬉しい・ありがたい・悲しい・辛いという4項目については年齢区分間で分散に有意差が見られなかったため一要因の分散分析を行い、楽しい・誇らしい・驚いた・恥ずかしい・懐かしい・戻りたいという6項目については年齢区分間で分散に有意差がみられたためKruskal Wallis検定を実施した。

その結果、嬉しい・ありがたいという感情について、有意差がみられた ($F=3.40$, $df=6/486$, ; $F=4.15$, $df=6/486$, いずれも $p < .05$)。多重比較 (Tukey-HSD) の結果、15~18歳の出来事は3~6歳、6~9歳の出来事よりも嬉しい・ありがたいと感じていることが示された (いずれも $p < .05$)。また、楽しい・誇らしい・懐かしいという感情について、有意差がみられた ($\chi^2=14.55$; $\chi^2=23.34$; $\chi^2=14.10$; $df=6$, いずれも $p < .05$)。有意差がみられた3項目について、Mann-Whitney検定を行った結果、楽しい・誇らしいという感情において15~18歳の出来事は3~6歳、6~9歳の出来事よりも平均ランクが有意に高いことが示された (いずれも $p < .05$)。懐かしいという感情は、18歳以上の出来事が他の年齢区分の出来事よりも有意に低いことが示された ($p < .05$)。悲しい・辛い・驚いた・恥ずかしい・戻りたいという感情については、有意差はみられなかった (悲しい: $F=.97$, $df=6/486$; 辛い: $F=.95$, $df=6/486$; 驚いた: $\chi^2=6.91$, $df=6$; 恥ずかしい: $\chi^2=11.00$, $df=6$; 戻りたい: $\chi^2=$

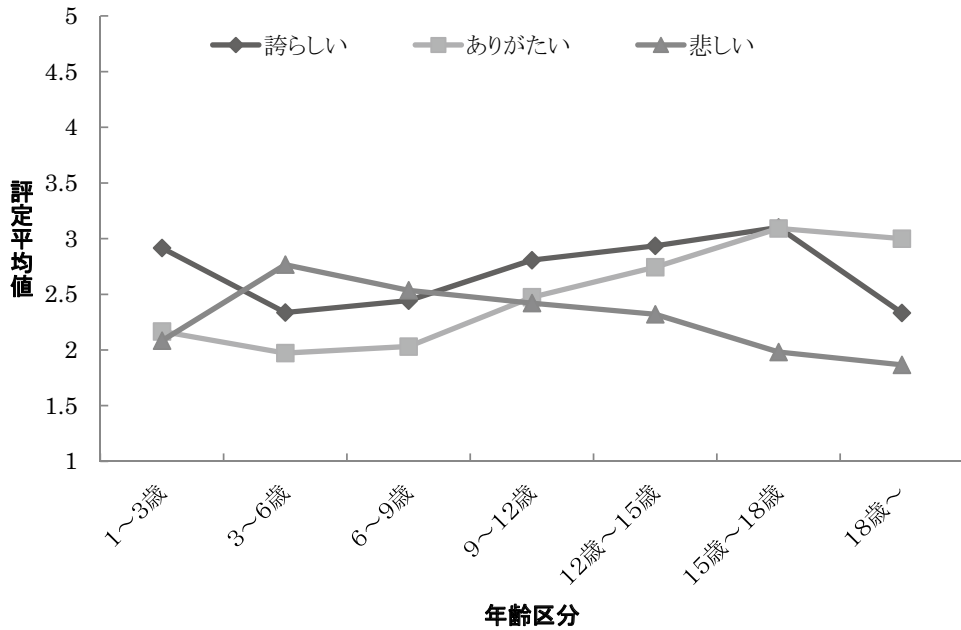


図2. 年齢区分ごとの各感情価における評定平均値（当時）

6.32, $df=6$, いずれも $n.s.$ 。

図3は、想起された出来事に対する当時の感情評定平均値のうち、有意差がみられた5項目（嬉しい・楽しい・誇らしい・ありがたい・懐かしい）を年齢区分ごとに表したものである。

以上より、出来事に対する個別の感情を年齢区分ごとに検討することで、大学生の出来事に対する個別の感情は出来事が起こった年齢によって違いがみられることを示すことができた。特に、15～18歳の出来事に対しては、当時も今も比較的ポジティブな感情をもっており、特に誇らしい、ありがたいという感情は残りやすいことが示唆された。したがって、誇らしい・ありがたいという感情は他のポジティブ感情とは異なる性質をもつ可能性が考えられる。また、3～6歳の出来事に対して12歳以降の出来事よりも当時は悲しいという感情をもちやすいが、出来事を想起した今は悲しいという感情の程度について年齢区分による違いはないことが示されたことか

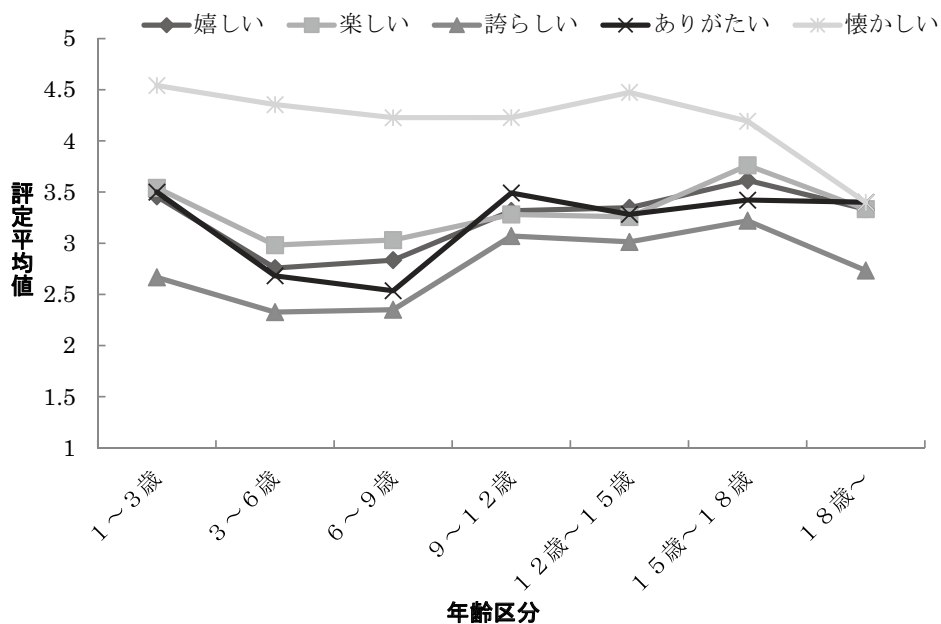


図3. 年齢区分ごとの各感情価における評定平均値（今）

ら、過去の出来事に対する悲しいという感情は感情が弱まる場合があるといえる。どの感情が時間経過によってどの程度変化するのかについては、次で検討した。

出来事に対する感情評定値の変化

出来事に対する当時の感情と今の感情を感情ごとに比較するため、8つの感情（嬉しい・楽しい・誇らしい・ありがたい・驚いた・悲しい・恥ずかしい・辛い）について、当時と今の中央値を比較した。Wilcoxon符号付順位検定を行った結果、ありがたいという感情の評定平均値のみ当時よりも今の方が有意に高く（ $z=9.06$, $p < .05$ ）、驚いた・悲しい・辛いという感情の評定平均値は当時より今の方が有意に低かった（ $z=5.54$, $z=7.09$, $z=7.77$, いずれも $p < .05$ ）。嬉しい・楽しい・誇らしい・恥ずかしいという感情については、有意差はみられなかった（ $z = .63$, $z = .82$, $z = .79$, $z = .56$, いずれも *n.s.*）。

有意な差がみられた4つの感情について、経験時の年齢によって感情の変化の程度が異なるのかを検討するため、出来事に対する感情の変化の程度を年齢区分間で比較することにした。そこで、それぞれの出来事における当時と今の感情変化率（出来事に対する今の評定値/出来事に対する当時の評定値）を算出し、年齢区分ごとの感情変化率の平均値を比較した。悲しい・辛いという感情については年齢区分間で分散に有意差がみられなかったため一要因の分散分析を行い、ありがたい・驚いたという感情については年齢区分間で分散に有意差がみられなかったためKruskal Wallis検定を実施した。

その結果、辛いという感情で年齢の主効果が有意であった（ $F(6,485)=2.44$, $p < .05$ ）。悲しいという感情では有意な差はみられなかった（ $F(6,486)=1.10$, *n.s.*）。辛いという感情について多重比較（Tukey-HSD）を行った結果、年齢区分ごとに有意な差はみられなかった。

また、ありがたい・驚いたという感情についても有意な差がみられた（ $\chi^2=18.01$, $df=6$; $\chi^2=16.93$, $df=6$, いずれも $p < .05$ ）。Mann-Whitney検定を行った結果、ありがたいという感情については、9～12歳の出来事に対する感情評定平均値の変化率が6～9歳、12～15歳、15～18歳の出来事の変化率よりも高いことが示された（ $p < .05$ ）。驚いたという感情については、有意な差はみられなかった。

したがって、ありがたいという感情は当時よりも今の方が感情の程度が高くなり、驚いた・悲しい・辛いといった感情については当時よりも今の方が低くなることが示唆された。さらに、6～9歳、12～15歳、15～18歳の出来事に比べると9～12歳の出来事に対してありがたいと感じる程度は時間経過による変化が大きいことが示唆された。

この結果から、当時はあまりありがたいと感じなかったが、今になってみるとありがたいと感じている出来事が存在すると考えられる。本研究によって、自伝的記憶の出来事に対するありがたいという感情は、嬉しいや楽しいといった、ポジティブ感情とは異なる特徴を持っている可能性が示唆された。さらに、悲しい・辛いといったネガティブ感情の程度は時間の経過とともに弱まるということも示された。これが出来事の内容による自伝的記憶の感情の特徴であるのか、青年期の自伝的記憶における感情の特徴であるかについては、さらに参加者を増やし、異なる年齢層の自伝的記憶を対象とした検討を行うことで明らかにできるだろう。

出来事の内容によるカテゴリ分類

出来事の内容について、Haque & Hasking (2010) のライフイベントに関する記憶の分類を参考に、13項目のカテゴリ【学校/教育・恋愛・他者主体⁴・けんか・怪我/病気・賞賛/達成・初めての出来事・転居・失敗・遊び（旅行など）・動物・政治/社会・その他】に分類した。2名によってカテゴリ分類し、評定者間一致率を計算したところ、高いカッパ係数が得られた（ $\kappa = .90$ ）。分類が一致しなかった内容については協議の上で分類を決定した。その後、恋愛・けんか・転居・動物・政治/社会のカテゴリに関しては各カテゴリとも該当する出来事数が全体の3%以下にあたる15個以下であったため、その他に含めた。分類したカテゴリの出来事数の上位5項目は、学校/教育（20.81%）（例：中学を卒業した）・遊び（旅行など）（15.10%）（例：友達と旅行に行った）・賞賛/達成（12.24%）（例：賞をもらった）・他者主体（11.83%）（例：祖父が亡くなった）・失敗（10.81%）（例：迷子になった）の順であった（その他を除く）。これらの各カテゴリにおける、経験時の年齢比率を表したのが図4である。

遊び（旅行など）・失敗の出来事は3～6歳、学校/教育・賞賛/達成の出来事は15～18歳が他の年齢区分の割合と比較して多いことがわかる。失敗の出来事は今から時間的距離の離れたより昔のこととして、賞賛/達成は、より時間的に今に近い出来事として認識しているとも読み取れるが、今後データを集積することで検討していきたい。

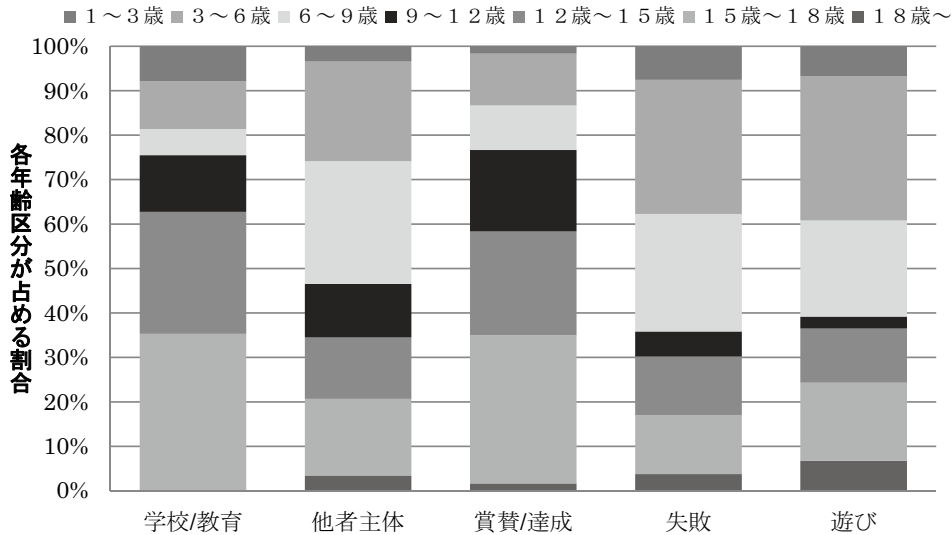


図4. 各カテゴリにおける出来事の年齢区分が占める割合 (上位5項目)

なお、4番目に比率の高かった内容カテゴリ、他者主体の出来事の内容について詳しくみておきたい。4項目の詳細なカテゴリ【家族・友人・先生や先輩・その他】に分類したところ、家族 (55.17%)・友人 (24.13%)・先生や先輩 (17.24%)・その他 (3.45%) の順に出来事数が多かった。他者主体の出来事の中では、家族に関する出来事が半数以上占めている点は注目に値するだろう。

次に、出来事が起こった場所について、8項目【自宅・保育園/幼稚園・学校・自宅以外の家・学習塾/習い事の教室・レジャー施設・その他・不明】に分類した。その結果、学校 (30.61%)、レジャー施設 (15.71%)、自宅 (14.29%)、保育園/幼稚園 (7.96%)、自宅以外の家 (5.31%)、学習塾/習い事の教室 (2.86%) の順に出来事数が多かった。

さらに、出来事が起こった時に一緒にいた人物について、5項目【自分1人・家族・友達や先輩/後輩・先生・その他】に分類した。その結果、友達や先輩/後輩 (38.48%)、家族 (36.01%)、先生 (13.12%)、自分1人 (7.43%)、その他 (4.96%) の順に出来事数が多かった。

以上より、大学生が想起する出来事は学校やレジャー施設、自宅などで起こった出来事が比較的多く、出来事を経験する際は1人の時よりも友達や先輩/後輩、家族などと一緒にいた出来事を想起していることが示された。Walls, Sperling & Weber (2001) は、大学生に学校の自伝的記憶を想起させた場合、学習や卒業といったイベントよりもスポーツや遊び、怪我など、自己に関連する社会的出来事を想起しやすいことを示している。日本の大学生も自分のみで経験する出来事だけではなく、他者と共有し、社会と結びつきのある、自己形成に関連した出来事を想起しやすい可能性が考えられる。

出来事の内容カテゴリと感情、自己との関係

最後に、出来事に対する感情を内容との関連から結果を考察すると、3~6歳における悲しいという当時の感情評定値の高さは失敗の出来事に結び付いている可能性が考えられる。しかし、この感情は当時よりも今のほうが低くなることから、幼少期の失敗の出来事は比較的記憶には残りやすいが、それに伴う感情は時間経過とともに弱まると考えられる。

15~18歳における誇らしい・ありがたいという感情における当時と今の評定値の高さは、賞賛/達成の出来事に結び付いている可能性がある。従来知見と同様に、本研究においても、大学生においてはありがたいという感情の出来事において、ポジティブ優位性効果 (Shulkind & Woldorf, 2005) が示されたといえよう。しかし、従来報告されている高齢者のポジティブ優位性効果 (Mather & Carstensen, 2005; Fernandes et al., 2008; 秋山・清水, 2012) とは質的に少し異なるのかもしれない。というのも、高齢者でみられる嬉しいや楽しいといったポジティブな感情での変化はみられず、ネガティブな感情は弱まることが、本結果からは示唆されているから

である。大学生における、ありがたいという感情は他の感情よりも出来事を想起し評価する際の、重要な感情指標になっている可能性が考えられる。今後は、出来事に対する繰り返しの想起の程度、重要度や鮮明度といった指標を追加し、詳細に、内容、感情と自己の間の関連性を検討したいと考える。また、本研究では、女子大学生のみを対象としていたため、男子大学生や、異なる年齢層を対象とした研究も行うことで、より生涯発達の視点から自伝的記憶を検討していく必要がある。

【註】

- 1 本研究をご指導、ご支援いただいた京都女子大学教授（現：千葉大学名誉教授）の御領謙先生、お茶の水女子大学准教授の上原泉先生に厚く御礼を申し上げます。
- 2 本研究では想起時の年齢が「5～6歳」などのように2歳に跨っている年齢の回答も分析対象に含めているため、このような年齢区分とした。「6歳」のように年齢を跨がずに各区分の境界年齢となる回答についてはより若い年齢区分に含め、「5～6歳」「6～7歳」のように2歳に跨っている年齢の回答については両方の年齢が含まれる区分に分類した。
- 3 エラーバーは標準誤差を示す。
- 4 他者が主体となっている出来事。例) 祖母が亡くなった

【引用文献一覧】

- 秋山学・清水寛之 (2012). 購買に関する自伝的記憶の特性：若齢者と高齢者における時間的分布とポジティブ優位性効果に関連して. *認知心理学研究*, 10, 67-79.
- Anderson, S.J., & Conway, M.A. (1993). Investigating the Structure of Autobiographical Memories. *Journal of experimental psychology. Learning, memory, and cognition*, 19, 1178-1196.
- Conway, M.A. (2005). Memory and the self. *Journal of Memory and Language*, 53, 594-628.
- Conway, M.A., & Pleydell-Pearce, C.W. (2000). The construction of autobiographical memories in the Self-Memory System. *Psychological Review*, 107, 261-288.
- Fernandes, M., Ross, M., Wiegand, M., & Schryer, E. (2008). Are the memories of older adults positively biased?. *Psychology and aging*, 23, 297-306.
- Habermas, T., & Bluck, S. (2000). Getting a life: the emergence of the life story in adolescence. *Psychological bulletin*, 126, 748-769.
- Haque, S., & Hasking, P.A. (2010). Life scripts for emotionally charged autobiographical memories: A cultural explanation of the reminiscence bump. *Memory*, 18, 712-729.
- Holmes, A., & Conway, M.A. (1999). Generation identity and the reminiscence bump: Memory for public and private events. *Journal of Adult Development*, 6, 21-34.
- 亀崎美沙子 (2010). ライフストーリーとライフストーリーの相違：桜井厚の議論を手がかりに. *東京家政大学博物館紀要*, 15, 11-23.
- Mather, M., & Carstensen, L.L. (2005). Aging and motivated cognition: The positivity effect in attention and memory. *Trends in Cognitive Sciences*, 9, 496-502.
- McLean, K.C. (2008). Stories of the young and the old: Personal continuity and narrative identity. *Developmental Psychology*, 44, 254-264.
- Pillemer, D. B., & White, S. H. (1989). Childhood events recalled by children and adults. *Advances in child development and behavior*, 21, 297-340.
- Rubin, D. C. (1982). On the retention function for autobiographical memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 21, 21-38.
- Russell, J. A. & Carroll, J.M. (1999). On the bipolarity of positive and negative affect. *Psychological bulletin*, 125, 3-30
- 榊美知子 (2007). 自伝的記憶の感情情報はどのように保持されているのか：領域構造の観点から. *教育心理学研究*, 55, 184-196.
- 佐藤浩一 (2008). 自伝的記憶の構造と機能 風間書房.
- 佐藤浩一・野村 信威・遠藤 由美・太田 信夫・越智 啓太・下島 裕美 (2006). 自伝的記憶の理論と方法(3). *日本認知科学会テクニカルレポート*, 57, 1-22.
- Schulkind, M. D., & Woldorf, G. M. (2005). Emotional organization of autobiographical memory. *Memory & cognition*, 33, 1025-1035.
- Shimizu, H., Anderson, D., & Takahashi, M. (2012). Autobiographical memories of specific social events for older and younger adults: Context dependency of the Memory Characteristics Questionnaire on recollection of 1970 and 2005 Japan World

- Expositions I. *Japanese Psychological Research*, 54, 182-194.
- Shimajima, Y. (2004). On feeling negative past as a part of current self: Subjective temporal organization of autobiographical memories. *Psychological reports*, 95, 907-913.
- Walls, R.T., Sperling, R.A., & Weber, K.D.(2001). Autobiographical memory of school. *The Journal of educational research*, 95, 116-127.
- Wilson, A., & Ross, M. (2003). The identity function of autobiographical memory: Time is on our side. *Memory*, 11, 137-149.
- 山本晃輔(2013). アイデンティティ確立の個人差が意図的および無意図的に想起された自伝的記憶に及ぼす影響. *発達心理学研究*, 24, 202-210.